

2016年度教師海外研修(パラグアイ) 研修報告書

学校名	名古屋市立北高等学校	氏名	安藤 理恵
-----	------------	----	-------

<印象に残る写真2点>

●写真1 [3411]

キャッサバの収穫

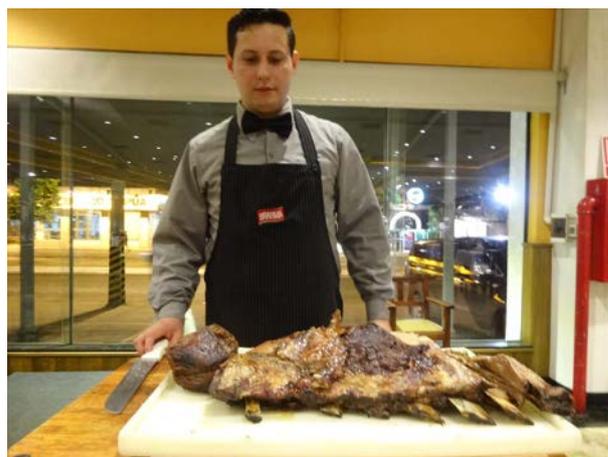
8月はキャッサバの収穫期、引き抜くとサツマイモのような形状のマندیオカが現れる。皮は厚さ5ミリで剥がれやすくなっており、隙間にナイフを入れれば簡単に皮がむける。中は白く、味はジャガイモのよう。



●写真2 [5586]

主食は肉!?

ビュッフスタイルで前菜・サラダ・パスタ・お寿司まであり、おいしい肉は様々な部位を食べ放題。お酒も飲んで、デザートビュッフェを堪能し、夕食でひとり1000円程度。こんなに安くていいのでしょうか。



1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私がこの研修に参加した目的は、まず自分の目で見て、感じることで、新たに違った視点で学ぶ事が出来る何かを見つけることであった。この研修で出会った多くの方々、様々な経緯で、また多くの異なった方法で国際社会に貢献している。「自分にできることが何かある。」と生徒に言うことは簡単であるが、高校生にとって、とりわけ自己肯定感が低く、自分は何も持っていないと感じている生徒たちにとっては、その何かを見つけることは極めて困難であると感じていた。今回の研修では、資格やスキルを持った人々が、特に難しく、際立ったことを現地で実行しているのではなく、日本であれば当たり前なのが当たり前でできていない発展途上国と呼ばれる国で、自己のスキルを利用しながら、地道に小さなことを変化させている姿を確認することができ、自分の生徒達が今後、国際開発を学び、社会に貢献していく際に、どんな方法で貢献していけるのかを見いだすためのきっかけやヒントをもらえたと実感している。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

パラグアイは私たちをとっても肯定的に受け入れてくれた。パラグアイで出会った人々、パラグアイの風土や文化も、私たちにはとても親近感のある存在であった。それはなぜか？それはたぶん、パラグアイに根付く日系人の方々が築き上げてきたものに、私たちが自然と取り込まれていったからであろう。我々はもちろん、肯定的に出会おうというつもりで現地へ降りたが、パラグアイはもっと大きく私たちを受け入れてくれた。日系人の方々は、パラグアイの人と共生しながら、独自の文化を保っている。単に共存しているのではなく、共に高めあい、助け合って共生している。そして、JICAのODAもまた、パラグアイに寄り添い、パラグアイと共に、パラグアイの発展のために援助している。そういったすべての方々のおかげで、私たちは受け入れられ、肯定的にパラグアイと出会えた。大切なことは、相手国に寄り添った共生であるのだと強く感じた。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

南米だけでなく、世界中に日系人はそのコミュニティを築いてきた。パラグアイでは、そのつながりがとても強いのだと感じる。日本人は入植し、胡麻の栽培を伝えたから、現在の輸出入の関係がある。同じことがまた大豆にも当てはまるであろう。日系人や、親日的な感情を持つパラグアイだからこそ、自ら栽培する大豆を利用し、東日本大震災の際に、各地に豆腐の支援を行うことに結びついた。そしてその行動がますます日本とパラグアイの関係を友好的かつ親密なものへと導いている。そのような関係が築いてこられた一つの理由として、パラグアイ人と日本人の気質の類似があげられるのではないだろうか。パラグアイ人の持つ真面目でおとなしい性格に、パラグアイと日本の同一性を感じる。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

パラグアイは今まさに、発展していく最中にある状態であるといわれている。それは、アジアで近年発展を遂げてきた多くの国々と類似していると感じた。アジア諸国は距離的な近さもあり、私たちはその影響を直に感じてくることができた。しかし、日本にとって、地球の全く裏側に位置するパラグアイの現状はまず知ることすら難しい。その中で、我々が共通の課題を持って共に考え、共に超えるということは、なかなかイメージしにくいものである。我々が教師として生徒にこの観点で何か学べることがあるとするなら、やはりそれは今回のような研修に自ら参加することであろう。実際に、パラグアイで起きている問題は、我々もまた戦後に経験したものである場合も多く、今まで日本が培ってきたスキルを利用して解決できるものもあるだろう。今後は今までにない新たな方法論を構築しながら、パラグアイの今に寄り添った支援を行っていくことが重要であるといえる。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICAの国際協力事業で今回視察させていただいたものは、すべてパラグアイに大いに貢献していると思われた。その中でも、青年ボランティアによるスポーツ振興はとてもよいと思う。まず、スポーツには言葉の壁がない。ルールはその競技のなかにだけある。スポーツは肯定的にお互いを知り合い、高めあうことのできる分野であると感じた。今回のリオデジャネイロオリンピックからも感じたが、パラグアイでスポーツ振興を実施している競技は、日本が実はとても強い分野であった。オリンピックがなければ、私自身はそれらのスポーツを採用していた意図が分からなかった。そういう意味でもよかったし、どんな場面でも若者が他文化の中で葛藤しながら取り組むことは、昨今海外にあまり興味もなく、外国に行きたがらない若者に対して、とてもよい影響を与えていると感じる。このような取り組みはぜひなくさないで欲しい。

今後あるとよいと思うものは、特定の資格やスキルがなくても、各国がただ問題を提示し、それに対する取り組み方法を公募し、コンペティションをするようなやり方で、人選するような仕組みがあるとよいと思う。既存の資格やスキルがなくても、貢献することができる可能性もあると考えるからである。現在はやや資格や

スキル先行型ではないかと思う。既存のスキル以外からも、貢献の糸口はあるように感じる。例えば、保健衛生や子育て支援は、資格はなくても専業主婦の人でも貢献できるといった具合に、公募の幅を広げてみるのもよいのではないか。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

① JICA パラグアイ事務所ブリーフィング [笹ヶ瀬／安藤]

パラグアイの概要と注意事項を伺った。特に概要では、現在の治安がとても安定していること、ただし自動車やバイクの増加に基づいて交通事故も増加していて注意が必要である点、健康管理に留意する点として野犬に注意することなど、パラグアイの生活に必要な経験者目線の概要であった。そこではまた、パラグアイの地理や歴史にもふれた。パラグアイの北方部分の多くはチャコと呼ばれる不毛の地で、南側約3分の1程度に人口が集中している点、大河に囲まれた内陸国であることを利用し、イタイプ公団が水力発電を行っており、国家の収入源として医療や就学のための格差是正に役立っている点、また、キリスト教徒が多く、ドイツ系メノナイトの集落が存在する点、離婚率が高くその背景にはアルゼンチン・ブラジルとの三国戦争で人口の多くを失った事にも一因している点、現在は韓国や中国の企業も多く参入している点など、入国し視察していく中でも、その言葉の多くの実際の意味を感じることができた。(安藤理恵)

⑤ イグアス湖流域総合管理体制強化プロジェクト [油浅／安藤]

イグアス湖におけるダムの持続可能性を保っていくための総合的取り組みを行っている。日本や他の先進国におけるダム利用の実績を生かしていきながら、パラグアイの現状を踏まえての管理体制強化ということだが、実際にパラグアイでは今のところ問題がそれほど明るみになってきていないことから、現地の企業(ANDE)からの管理体制強化への理解を得るのに苦心しているようだ。ANDEの危機管理意識が低いなかで、問題が起きる前に体制を強化するためパラダイムシフト型を採用し、その中で地形や水質を調査、湖岸侵食を予防するための水草の植樹などを実施している。最も印象に残った点は、管理強化を地元の人々と共に取り組んでいこうとする点だ。市民参加型を取り入れる方法は、とても現代的なやり方で、かつて日本や先進国で実施してきた政府や自治体・企業や専門家主導型とはとても異なっている。現代のパラグアイでの、現代的なやり方で地域に根差した取り組みにとっても共感する。(安藤理恵)

⑨ パラグアイ人宅でのホームステイ [全員]

私のステイ先アリミンダさんのお宅は、広大な敷地を利用して放牧や大豆の栽培を行っている。敬虔なクリスチャンであるご家族は、その日教会の神父さまのお誕生日会があるということで、私も同伴させていただいた。そこで行われていた会がとても印象的だったので、ここに紹介したい。多くの家族が集い、パーティーが始まると、MCからある紙袋が示され、ここにプレゼントを詰め込んでいくというのだ。その袋をリレー形式で「この中で最も〇〇な人(例えば、優しいひと、親切な人、美しい人など)」を選び、手渡していく。でも一向に袋には誰も何も入れない。「〇〇な人」と指名する相手は、自分の家族であったり、そのコミュニティの重要な人物だったり、皆が敬愛する人であった。リレーが進み、その袋が誕生日である神父さまに渡ると、そのようなみんながあなたの誕生日をお祝いしているのだという趣旨の言葉をMCが述べて、みんなで拍手。別に用意された袋一杯のチョコレートと、神父さまが子供たちにプレゼントし会はお開きとなった。心温まる、素敵な会に参加できたことに感謝している。(安藤理恵)

⑪ 青年海外協力隊(看護師)活動/パラシオ・デ・フスティシア保健ポスト、ドン・ボスコ・サレシアノ高校 [清水／安藤]

パラシオ・デ・フスティシア保健ポストで活動している青年海外協力隊の大原さんは、ビジャリカの地を日本の京都になぞらえていた。共通点を見出して分析した着眼点に納得させられ、そのような同一性から我々もビジャリカに好感を抱いた。大原さんは看護師でありながら、健康ポストでは看護師の仕事というよりむしろ、それ以前の段階に必要な何かを整備するといった活動を実践されている。カルテの整理の効率化、健康ポストに対しての周知活動、健康促進のためのダンスを利用した肥満対策など、彼女のモットーは「一人ではやらない。NOと言わない。」多くの人を取り込み、その地区の独自性に配慮した活動、彼女のその前向きさが素晴らしい。ドン・ボスコ・サレシアノ高校では、妊娠・育児に関する授業を実施され、生徒を巻き込むアクティブラーニングを実践していた。生徒からはシャイで真面目で大人しい印象を受けた。キリスト教国では妊娠中絶が認められておらず、そのような教育活動に対しても風当たりが強いそうだ。制約の多い中での、意義深い活動であった。(安藤理恵)

⑮ 白沢商工株式会社 [安藤/清水]

白沢商工株式会社白沢社長の、「パラグアイの人々を貧困から救いたい。」という言葉が、パラグアイの中で日系人の生き方を表していると感じた。「我々だけが、利益を得てはダメだ。周りのパラグアイ人は小農で貧しい。」その貧困対策は、国連のモデルにもなったほどである。彼の企業哲学ともいえる、「人のための企業は間違わない。人のためにある企業は広がっていく。」は非常に深い意味をもっている。また、彼は外国に出たがらない近年の日本の若者に対して、「外に出て日本を見ると日本が好きになる。便利過ぎないところで得る経験はたくましさを生む。」とメッセージをくれた。生徒にぜひ伝えたい。そして、「立場を尊重して、自分から積極的に入っていく。片隅にいて、静かにしていたら呼ばれないのだ。」という姿勢を自分も実践していきたい。(安藤理恵)

⑯ JICA パラグアイ事務所報告会 [油浅/安藤]

事務所報告会は、それぞれに感じたことを発表する場となった。私自身はこの研修に参加し、様々な校種の先生方がいろいろなアプローチで国際理解教育を実践されていることを知り、またそのような取り組みがますます広がっていくことで、その総合的学習の機会を与えられる最後の学校として、高校ではどのような取り組みをしていくべきなのかを考えさせられた。私たち高校教諭の使命は、私たちが出会ったような素晴らしい視点をもつ人材をたくさん世の中に送り出すことだろう。小学校低学年に、この研修に参加している先生から学んだ児童が、10年後には高校生となる。常に新しい視点を取り入れ自分なりにSDG'sを生徒と共に学び続けたいと強く感じた。(安藤理恵)

5. 来年度参加する先生へのアドバイス(持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

準備は周到にしたほうがよいといわれるが、インターネットの普及している今では、訪問国の天気予報さえ事前に知りえる。荷物は精選し、身軽な旅がよい。事前に読み物をいくら読んでも、実際に見聞きするものに勝るものはない。先入観を持たず、身をゆだね、事後にじっくりと書物に目を通すやり方もありだと感じる。

6. その他全般を通じての感想・意見など

多くの人に体験してもらいたい、素晴らしいプログラムだと思う。多くの人へのこの体験を伝えたい。

以上